看護師

患者さんに真摯に向き合う喜び

国立病院機構大阪刀根山医療センター
呼吸不全病棟勤務
（慢性呼吸器疾患看護認定看護師）
藤田 愛さん

人の命にかかわる看護師の仕事は、専門的なスキルの高さはもちろん、人とのコミュニケーション能力が重視されています。医師の診断や診療計画に従い、診療や治療の補助、患者さんの身の回りの世話まで幅広く行い、人間としての総合的な力も常に求められます。とてもやりがいを感じられる一方で、仕事の内容が厳しいのも現実です。いま、どんな思いで働いているのか、国立病院機構大阪刀根山医療センターの看護師、藤田愛さんにお聞きしました。（聞き手・池田知隆）

――いまの職場は、どんなところですか。

ここでは、呼吸器疾患や神経・筋疾患及び骨・運動器疾患を中心とした専門医療を推進しているほか総合的な医療に取り組んでいる病院です。1917（大正6）年に大阪市立刀根山療養所として創設され、長い歴史があります。結核の療養所もありましたが、いまは閉鎖されています。

――主としてどんな患者をみておられるのですか

私は昨年から呼吸器疾患の担当スタッフとして働いています。肺がん、非定型抗酸菌症、慢性気管支炎、気管支拡張症、肺気腫、喘息、肺真菌症、肺線維症、慢性呼吸不全（在宅酸素療法、在宅人工呼吸療法）、心肺不全、肺結核など、病状はさまざまですね。

――藤田さんはどんな一日を過ごしておられますか。

看護師の仕事はさまざまで、外来、病棟担当などによって仕事の内容は異なります。私の場合、午前9時から午後1、2時ごろまで、病棟で10～15人のスタッフと一緒に医師の指示にしたがいながら治療、報告、指導などに当たっています。慢性呼吸器疾患看護認定の資格も取得していますので、慢性疾患の患者さんやスタッフの相談にのって、いろんなアドバイスをするのも私の仕事です。患者さんの日々の記録を残していくので遅くまで勤務することもあり、大変ですが、患者さんのためにベストを尽くせるように頑張っています。

――コロナ禍の対応で苦労されていることは。

この病院は新型コロナウイルス感染症に係る重点医療機関ですので、昨年度は特に人工呼吸器をつけなくてはいけない患者さんが相次ぎました。毎日、気管挿管したり、痰を吸引したり、本当にバタバタしました。終末期医療を迎える患者さんも多く、家族にも看取られず亡くなっていく姿には胸が痛くなりました。

呼吸不全の場合、進行が複雑で、予測できず、急死されることも少なくありません。コロナでなければ、いっしょに看取りにつきあっていけるのに、と葛藤を抱きました。その気持ちをどのようにすればいいのか、それは新しい課題です。

――そもそもどうしてこの仕事を選んだのですか。

中学生のころ、軽い腎臓病で入院したんです。すごく病気への不安を抱いていたとき、仕事に就いて1年目の新人の看護師さんがやさしく寄り添っていただきました。ああ、こんな人になりたいな、という強い思いが生まれました。

私は豊中市生まれで、地元の高校を卒業後、この病院内の敷地にある大阪医療看護専門学校で学び、ここで働いています。自転車からバイク、車と変わったのは、交通手段だけですね（笑）。

――仕事のやりがいは。

仕事が忙しく、なかなか自分の時間が取れないので、正直言って、何度か辞めようかと思いました。看護職について5年目に、

認定書を持つ藤田さん

「慢性呼吸器疾患看護認定」の資格を取得し、やはり責任のある仕事を続けたいと考えるようになりました。

だれでも看護職について5年目くらいで、どういうキャリアを重ねていくのか、岐路に立たされます。ゼネラリストになるのか、スペシャリストになるのか、教育職に就くのか、病院内で役職を求めていくのか。私は呼吸器専門の看護師として患者さんに向き合っていく道を選びました。

――なにか看護職について良かったと思えることは。

職場のみなさんと（後列中央が藤田さん）

酸素療法もせず、人工呼吸器も使用せず、最後まで自力で呼吸しようという患者さんもいて、生きるパワーをもらったこともあります。80歳だったその女性は、夫の介護を受けながら暮らし、いわゆる老老介護でした。終末期に入り、認知症の症状もでていたのですが、在宅で最期を迎えたいという希望を受け止め、家族の方といっしょに看取りました。長い期間にわたってその人の人生につき合えることができる喜びを感じました。

――最近は、どんな患者さんが増えていますか。

非定型抗酸菌症と呼ばれる病気です。咳・痰・血痰・発熱・食欲不振・体重減少・全身倦怠感などの症状は結核と同じです。菌は結核の仲間ですが、結核とは全く別の病気で、患者さんから他人に感染する事はありません。経過観察、内服治療、点滴、入院などの方法をとりますが、あわてずに主治医の指示に従って対処してください。

――看護職をめぐっての要望は。

イギリスやアメリカなど海外研修を通して感じたのは、欧米では看護職の社会的地位が高いことです。もちろん、それなりの専門職としての知識や責任が求められてのことですが。看護師が「ミニ・ドクター」として特定の医療行為ができ、クリニックも開設していました。日本でもそのようなことが認定され、看護の仕事の大切さを見直してほしいですね。

独立行政法人国立病院機構大阪刀根山医療センター

――どんな人に看護職に就いてほしいですか。

いま、大阪医療看護専門学校で呼吸器機能障害を持っている患者さんへの看護について講義しています。学生はとても素直で、正直で、いまの気持ちをそのまま持ち続けてほしいと思います。いろんな人と出会い、それぞれの人生観に向き合いながら、いっしょに寄り添っていってほしいですね。

独立行政法人国立病院機構
大阪刀根山医療センター
呼吸器疾患、神経・筋疾患（筋ジスを含む）、および骨・運動器（整形外科）疾患の専門病院。呼吸器疾患以外、神経・筋疾患についてはパーキンソン病、筋萎縮性側索硬化症、脊髄小脳変性症、重症筋無力症、筋ジストロフィーなど、骨・運動器疾患については脊椎疾患、関節リウマチ、変形性関節症の疾病について、高度の診断と治療を行っている。病床数は410床（内訳）一般410床（筋ジス106床含む）新型コロナウイルス感染症に係る重点医療機関になっている
〒560-8552 大阪府豊中市刀根山5丁目1番1号

大阪医療看護専門学校
本校は地域住民の医療を担う独立行政法人国立病院機構大阪刀根山医療センターの敷地内にあります。2010年4月1日に、学校法人大阪滋慶学園の第5番目の専門学校として設置された看護学科（昼3年制、1学年定員80名）です。

（協力：滋慶学園グループ）